



# 住まいを失う若者への 新たな取り組みに関する 実践報告書

住まいを失う若者の居住支援及び  
全国ネットワークの立ち上げ事業  
(独立行政法人福祉医療機構令和  
4年度補正予算助成金事業)

特定非営利活動法人サンカクシャ

## 1. 取り組みの背景

サンカクシャでは、15歳から25歳くらいまでの若者に対して、居場所作り、仕事のサポート、住まいのサポートを行っており、これまで約300名の若者に伴走型の支援を提供している。

住まいについては、21年、北区でのシェアハウスの開設を皮切りに、22年度には豊島区、板橋区、北区とシェアハウスの拠点を拡大し、定員も26人と増やした。入居期間中に自立できるよう、仕事に関わるサポートも含め、より多くの若者の支援を展開してきた。22年度には53人からの住まいの相談を受け、24人の若者へ住まいを提供した。

サポートする若者の増加に伴い、シェアハウスでは若者のニーズに対応できないようなケースが出てきた。具体的には、生活保護を受給し、アパート転宅するための一時的な居住として入居する若者や、共同生活自体が特性上難しい若者である。シェアハウスで居住者同士のトラブルが増えると、居住者双方が暮らしの安全と安心を守れなくなってしまうと同時に、社会に出て働く意欲も削がれてしまう負の連鎖が生まれてしまう。より多様なニーズに応えることが必要である。

また、児童福祉法の対象年齢ではなくなる18歳以降の居場所の不足、さらには若者の住まいに関してはコロナ禍以降、急激にニーズが増加したにも関わらず、制度や民間の支援が追いついていない状況にある。シェアハウスを開設して以来、家出や家を追い出される若者、虐待を受けてきたが発見や保護がされずにきた若者などからの相談が絶えることがないが、一団体でできることには限りがある。若者の居場所、特に若者の住まいに関しては、民間の実践も少なく、課題として認知も十分にされていないため、先駆的な取り組みを行い、課題を周知していくことが必要である。

## 2. 取り組みの目的

- 住まいを失う若者が、安全な住まいを確保し、安心できる大人と共に自立に向かえることを目的としている。
- 特に本事業では、「単身アパートでの短期間の住まい」を前提とした「シェルター」を通じた居住支援を行う。

## 3. 取り組み内容

- 住まいを失った若者が安心して住まいを確保し、生活を立て直すことができるよう、豊島区、北区内に、シェルター5部屋新規開設する。
- シェルター入居後は、制度につなぐための同行支援や一人暮らしなど自立に向けた伴走型の就労支援を行い、自立を促す。
- サンカクシャの別事業である居場所や仕事サポートとも連携して、若者の状況やニーズに応じて利用を促す。
- 住まいや就労支援の提供だけでなく、若者の住まいに関する課題を周知できるような取り組みを実施し、多くの方に若者の現状を伝えていけるよう情報発信にも力を入れる。

## 4. 取り組み結果

### 4-1. シェルターの開設

シェルターを5拠点開設し、10名の若者が入居した。就労や修学、一人暮らしなど一人ひとりの自立に向けて生活立て直しのための伴走支援を実施した。

住まいの提供パターンは3つに類型される。

①シェルターに入居し、生活保護を申請し、1ヶ月くらいの間にアパートを探して転居し、一人暮らしをしてから、生活保護を抜け自立していくための伴走支援モデルで若者をサポート。

②就労はできるものの、自力で物件確保のための初期費用が支払えず、一定期間初期費用なしで入居し、貯蓄をしてもらい短期で自力でアパートを借りるために活用。

③困難ケースの緊急の住まいの提供。

また住まいの相談は当初の想定を大きく上回り、114人からの相談を受けた。



[写真：シェルターA室内]



[写真：シェルターB室内]

### 4-2. 全国ネットワークの立ち上げ事業

全国各地で居住支援を行なっている12の民間団体を集め、不定期ながらも交流会や支援・運営における課題のオンラインでの情報交換会を行なった。民間団体が持ち出しで居住支援を行なっている実態が明らかになった。ゆるやかな民間の居住支援団体のネットワークが構築され、日々の支援や事業運営についての困りごとや情報の共有を行っている。

東京都、豊島区等に若者年代の住まいの課題について情報共有と意見交換の場を設け、視察にも来ていただいた。

## 5.利用者へのアンケート

利用者のうち4人からインタビュー形式によるアンケートを実施した。

質問項目は、①自身の生い立ち、②サンカクシャに繋がる前の支援、③サンカクシャの生活支援の感想等、④生活支援以外で繋がっているサンカクシャの活動内容、⑤サンカクシャのスタッフについての感想等、⑥サンカクシャ以外で繋がっている場、⑦今後の展望の7項目。

個人が特定できるような情報を除いたうえで、アンケート結果を抜粋して紹介したい。

### 5-1.自身の生い立ち

- 父の虐待が激しかった
- 父が怖く母も干渉するタイプで家族が怖くなった
- 父親に日頃から暴力を受けるようになった
- 成人後、親が厳しくなった



[写真：食料品購入の同行]

### 5-2.サンカクシャに繋がる前の支援

- 児童相談所
- ない
- DVシェルター

### 5-3.サンカクシャの生活支援内容・感想等

- ここまでだったら許容できる、などを自分の意思で決めることができる
- 仕事と生活のバランスを自分で決められる
- サンカクシャはルールがなさすぎると感じる
- フランクさがありがたかった
- 個室だと寂しさもある
- サンカクキチ（居場所）の方は賑やかでいいなと思う

#### 5-4.生活支援以外で繋がっているサンカクシャの活動内容

- サンカクキチ（居場所）：パソコンゲーム、食事のため
- サンカクキチ（居場所）：女子があまりいないから、携帯いじるか、寝るしかない
- サンカクキチ（居場所）：寂しい時に遊びに来ている
- サンカククエスト（就業体験プログラム）

#### 5-5.サンカクシャのスタッフについての感想等

- ちゃんとしてないように見えて、裏ではちゃんとしてる印象
- 色々協力してアドバイスをくれる
- 職員が仕事仕事していない
- 仕事しているところが見えないのがいい。
- ファミリー的な、第2の家族的な感じ

#### 5-6.サンカクシャ以外で繋がっている場

- 友人
- 家族
- 大学
- バイト先
- 他の民間支援団体

#### 5-7.今後の展望

- 仕事をして生活をしたい
- 友人にもう一回ちゃんと会いたい
- 普通になりたい。他の人がやっているような生活。
- もっと友達と交流できるくらいに時間と金に余裕を作りたい
- 無駄遣いしない

## 6. 考察

### 6-1. 受益者像の明確化

23年度の活動を通じて住まいを失う若者の受益者像をより明確にすることができた。具体的には以下のとおり。

- ・ 家族関係の困難性

長らく虐待を受けているが発見されなかった、または保護等を経験したが自宅に帰された若者は、家を自らの居場所として位置付けることができない。ずっと虐待を受けてきたことにより、精神的な不安定さを抱えていたり、実際に精神疾患を患っているケースも多く、継続的な就労が難しいにも関わらず家から離れることのできるほどの経済的余力も持てない状況におかれている状況が明らかとなった。

- ・ 生活支援の必要性

発達障害や軽度知的障害と考えられる傾向性があり生活をしていく上で支障が出ている若者が増加しているが、これまでの生育環境も影響して医療や福祉にもつながっておらず、手帳取得に至っていない者も多い。特にシェルターでは料理・洗濯・掃除・金銭管理といった基本的な生活が成り立たない若者の存在が顕著となった。



[写真：料理の作り方レクチャー]



[写真：洋服購入の同行]

## 6-2.若者の住まいの需給バランスの不均衡

サンカクシャで居住支援を行っているということが各機関・団体に知られてきている影響か、他機関等から情報提供を受けて問合せが来るケースも少なくなかった。

都内だけでなく遠方からの問い合わせも来るようになっている。それだけ若者年代の居住支援のニーズがあるのに対応できている公的・私的なリソースが不足していることが顕在化してきているようにも感じられる。サンカクシャに空室がない場合は、ホテルの緊急宿泊やシェアハウスの提供をされている複数の他団体と連携している。本人の状況と合わせてマッチングできるようであればおつなぎしているが、物理的な部屋数が圧倒的に足りていない。一方で公的なシェルターや生活困窮者向けの施設は必ずしも満床ではないようだが、サンカクシャに相談にくるような若者年代の利用を想定していることから、門限や携帯電話の利用に制限があったり就労を条件とした入居を求められたりと、若者の生活ニーズとマッチしていないため、公的支援にもつながりにくいという側面がある。

## 6-3.サンカクシャが提供している価値

アンケートの人数が少ないため、アンケート結果のみで断言することはできないが、サンカクシャでは居場所（サンカクキチ）や仕事サポート（サンカククエスト）の提供が可能である。このことから、単に居宅提供をしているだけでなく、伴走支援を密に行っていることが特徴的である。支援の個別性を重視し、つながった若者一人一人の状況にあわせて定期的な相談や面談、生活サポートの実施。意欲換気につながるレクリエーション活動への参加も促しながら、所属欲求を満たせるようなかわりを意識して取り組んでいる。

また、シェルターを利用する若者が、居場所（サンカクキチ）を利用することで、実家や親から離れて休息することができること、自分にとっての居場所と感じられるような場所の獲得、ゲームや外出・ネットを自由に使える環境、単身住まいの若者の寂しさの払拭などにつながっている。最終的には仕事サポート（サンカククエスト）の事業につながり、仕事についての相談や若者が関心を持つような就労体験や、地域にある企業やお店からの仕事をサンカクシャが受託し若者に提供することで伴走を行っている。

シェルターを出ることそのものが目的ではなく、本人なりの見通しが立ったうえで次のステップに進むことが自立支援の目的と捉えられ、サンカクシャにいたることが本人のペースに合わせた移行期とも捉えられる。就労等を条件付けた単なる居宅提供では重複した困難を抱えた若者からのニーズに応えることは難しく、それが公的支援へのつながらなさに現れている可能性もある。そこにサンカクシャの伴走支援が入ることによって、大人への不信感、働く・生きることへの意欲低下を回復させ、働くことのハードルを下げつつ、本人の意欲と結びつけていく点について、一定の評価を得られているのではと推察される。

相談にくる若者たちは安全な居宅提供だけでは不十分で、心理的ケアや生活立て直しの伴走支援こそが重要であると言える。行政の制度、連携している精神科への紹介、彼らの就労を支える企業や地域の大人との連携体制を充実させていくことが今後の課題として挙げられる。



## 住まいを失う若者への新たな取り組みに関する実践報告書

アンケート調査：田中悠輝

執筆：塚本いづみ、久保菜緒

発行日：2024年4月

発行者：特定非営利活動法人 サンカクシャ  
〒170-0012 東京都豊島区上池袋4-35-12

電話：03-6905-8287

[HTTPS://WWW.SANKAKUSHA.OR.JP](https://www.sankakusha.or.jp)